

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

| | |
|--------------------|---|
| 教員氏名 | 酒巻 和子 |
| 主な担当科目 | 西洋音楽史Ⅰ,西洋音楽史特殊講義,西洋音楽史研究Ⅱ,作曲家・作品研究,音楽評論概説,課題研究Ⅰ,課題研究Ⅱ,卒業研究,芸特応用研究Ⅰ,芸特応用研究Ⅱ,音楽指導論特殊講義,音楽文化研究Ⅰ,博士研究指導_音楽芸術表現領域,博士西洋音楽史特講Ⅱ |
| シラバス | ここをクリック(本学ポータルサイトトップページが表示されます。) ※画面下「シラバス」>「シラバスを検索するにはこちらをクリックしてください。」をクリック |
| 2023年の教育目標・授業に臨む姿勢 | 短大、学部、大学院いずれにおいても、担当科目それぞれに学生自身が学修成果の獲得を実感できるように努めた。学生個々の学修の段階と理解度を確保するために、毎時間のコメント用紙を活用したり、授業内での短時間成果発表を取り入れたりした。授業外学修の習慣が身に着くよう、科目ごとに無理のない課題を設定した。 |
| 2023年の教育に関する自己評価 | 「西洋音楽史Ⅰ」のコメント用紙では、質問や感想などの記載が次第に増え、活用できたと思われる。授業内発表については、短時間であっても学生の積極的な取組みに有効であり、特に修士課程で必修の「西洋音楽史特殊講義」(Cクラス)では、発表のための資料作成を通じて学生が研究力を身に付け、研究テーマに対する意識向上にも役立つことが確認できた。短大の卒業研究および大学院の修士論文でも充実した成果をあげることができた。一方で、授業外学修の指導については、まだ課題が残る認識である。 |
| 2023年のFD活動に関する自己評価 | 研究科FD副委員長として全体研修会やFD年間テーマについて企画および打ち合わせに参加した。多様な学生に関するテーマで依頼した外部講師の方々とも複数回の打ち合わせを行った。9月の全体研修会では午後の分科会で2グループのファシリテーターを努めた。学内組織のFD研修会では、教員間で現状を共有した。 |
| 授業改善のために取り入れた研修内容 | 多様な学生への個別対応は難しいことではあるが、クラス授業でも学生個々の状況を把握するように努めた。また、高大接続および学部と大学院との接続について、担当科目ごとに意識するようになった。特に外部からの進学者が増えている修士課程では、必修の「西洋音楽史特殊講義」において、それぞれの学生がすでに獲得できている知識を丁寧に確認し、必要に応じて補足する必要があった。 |

2023 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

1)アンケート結果に対する所見

2023 年度前期に個人で担当した科目は、「西洋音楽史特殊講義」と「西洋音楽史研究Ⅱ」の 2 科目で、いずれも大学院修士課程の開講科目である。必修科目の「西洋音楽史特殊講義」では、年度当初に実施するプレイスメントテストの結果にしたがってクラス分けをしている。上級クラスを担当しているため、学生による短時間の授業内発表を取り入れている。始めた当初は時間管理が難しかったが、配付資料を充実させることにより問題なく授業と両立できるようになった。「総合満足度」および「授業は学生とのコミュニケーションに努めながら進められている」のポイントが高かったほか、すべての設問項目でプラスの回答を得ることができた。自由記述の「学生が自由に課題を選び発表できたのでとても良かった」も肯定的な嬉しいコメントだった。STA としてこの科目についてくれた博士後期課程の学生が、折に触れて西洋音楽史の学修について先輩として適切な助言をしてくれたことも、学生の意欲向上に効果的であったと思われる。「西洋音楽史研究Ⅱ」は隔年開講の選択科目で、バロック時代の宗教的声楽作品に焦点を当てたものである。専攻にかかわらず、時代およびジャンルに特有の楽曲様式や演奏習慣など、学ぶべきテーマを豊富に見出すことができる科目であり、「総合満足度」など概ね全員がプラスの回答であった。しかしその一方で、ごく例外的と思えるものの履修生の中に「自分の研究に役立っている」とは考えられず、「興味や関心を持って出席している」と答えられない学生がいたことがわかり、残念だった。「シラバスを読み、教育目標と学修成果を理解している」に「あまり思わない」と回答したひとりの同じ学生なのではないかと推測できる。

2)要望への対応・改善方策

特に具体的な要望はなかったが、「西洋音楽史特殊講義」では、履修した学生たちが積極的に各自の研究テーマに取り組むことのできるきっかけとして、授業内発表を続けたい。「西洋音楽史研究Ⅱ」では、学生が専門と異なる分野にも興味や関心を持てるような工夫をしなければと改めて考えた。作曲家と作品例の選択を再考し、より演奏実践に結びついた楽曲研究を心がけたいと思う。

3)今後の課題

西洋音楽史系の科目は相互に関連し、専攻にかかわらず音楽芸術の広く深い考察につながることを、修士課程の学生たちが自然に理解できるようにすることが課題である。

以上

2023 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:2838 教員名:宮崎 晴代

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

教員コード:2806 教員名: 近藤 譲

1)アンケート結果に対する所見

「音楽文化研究Ⅰ」は、修士課程音楽芸術運営専攻における「音楽と文化」新設に伴う2023 年度の新規開講科目(必修選択)のひとつである。楽譜に焦点をあて、時代ごとにその変遷と役割を学びながら社会や文化的な背景との関連を学び、さらに作曲者、演奏者、享受者(聴き手)それぞれの創造的な活動について考え、音楽芸術について深く考える力を養うことを授業の目標とした。

アンケート結果により、学生はシラバスの内容を理解した上で履修したことも確認できた。そして「総合満足度」および「授業は学生とのコミュニケーションに努めながら進められている」、「自分はこの授業を受けて、ものの見方や考え方が広がった」で高評価を得られたほか、全項目でプラスの結果であったことから、概ね目標を達成できたものと思われる。自由記述には「楽譜の歴史を学ぶ中で、音楽とは何であるか根源的疑問を持つことができた」のほか「興味はあるが、難しかった。半期科目でなく通年でもう少しじっくりと学びたいと思った」という記載があり、参考にしたい。

2)要望への対応・改善方策

3 名の教員はそれぞれの担当回以外の授業にも参加し、授業内容を共有して学生の理解度を確認したり質問や発言に対応したりした。学修歴によって基礎知識や経験がそれぞれ異なることもあり、一部の学生には、たしかに興味があっても難しい印象を与えることもあったかもしれない。特に日頃慣れ親しんでいる五線譜とは異なる楽譜を読む、または書く、という実践を伴う授業内容の場合には、取り組みやすい譜例や小さな課題から導入し、より丁寧な説明を心がけることが改善につながると思われる。

3)今後の課題

学修成果のひとつとして挙げている「音楽について自由にディスカッションをすることにより、自身の考えを言葉で表現する能力を身に着けることができる」という部分を課題とし、今後、よりよい授業運営について検討したい。

以上

2023 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0081 教員名:酒巻 和子

1)アンケート結果に対する所見

個人で担当した通年科目「西洋音楽史Ⅰ」(短大 A クラス)、「作曲家・作品研究」(学・短 B クラス)について確認した。Q10 総合満足度は、「西洋音楽史Ⅰ」で 3.74 および 4 段階の 3 と 4 の割合 96.7%、「作曲家・作品研究」で 3.91 および同割合 100%と、いずれも前年度と比較して向上した。「西洋音楽史Ⅰ」は、前年度に Q8「予習・復習をしている」という設問に対して数値が低く、課題ととらえていた。今回この数値が向上しており、定期的な「まとめ」とそのフィードバック等が効果的だったと考えられる。ほかに「プリントや資料が分かりやすかった」「音源の視聴で理解が深まった」「毎回いろいろな発見があった」「今まで関心のなかった時代や作曲家に目を向けることが出来た」など複数の肯定的な記述があった。しかし一部ではあるが授業が「むずかしい」という正直な声も寄せられており、さらなる工夫が求められている。一方「作曲家・作品研究」では、例年通り今回も高い満足度を獲得することができた。「受講生の授業態度もよく、集中して授業を聞くことができた」「発表についてのフィードバックがプレゼンの勉強になった」というコメントが示す通り、授業内発表を通じて学生が自らの学修成果を実感できたものと思われる。

複数教員による担当科目のうち「音楽評論概説」は、例年 3 名で担当しているがこの年は他の科目での教員調整のため急遽 2 名担当に変更しなくてはならなかった。授業は当初のシラバス通り実施し、アンケート結果は 3.33 および同割合 100%と大きな問題はなかったものの、この件に関する記述があり、今後じゅうぶん注意しなければならないと思った。

2)要望への対応・改善方策

作品を実際に聴くことは、音楽の理解に欠かせない重要な要素である。「もっと聴きたい」という要望に対しては、時間の限られた授業内でもなるべく視聴の時間を確保したい。また今回初めて「ほんの一部ですが、私語、遅刻などをする学生がいて、集中力をそがれることがあったのは残念です」という指摘があった。適切な学修環境を整えることも重要な責務であることを念頭に、教室内の状況をしっかり把握するようにしたい。

3)今後の課題

予習・復習については向上の様子も見えるがまだ十分とはいえないため、授業外学修の方法等を適切に指導する。「西洋音楽史Ⅰ」では、コメント用紙を活用し、毎回の授業内容の理解度を確認することが、学生の自主的な学修につなげるための課題といえる。

以上

「芸特応用研究Ⅰ」「芸特応用研究Ⅱ」(担当:音楽と社会分科会)
2023年度 担当教員:二俣泉、江口文子、廣田美穂、服部孝也、小森谷巧、酒巻和子

1) アンケート結果に対する所見

コース独自の必修科目で、定期的な成果発表会において学年を超えた交流ができることが特色である。2023年度から内容の一部を変更し、芸術鑑賞とその発表に加えて、学生からの要望の高かったアンサンブルの演奏による成果発表を取り入れた。自由記述に見られる通り、この点については学生から高い満足を得ることができた。特に後期の成果発表会での各教員からのフィードバックコメントも大いに励みになったと思われる。

2) 要望への対応・改善方策

要望の中に、昨年末のようなコリホールでの成果発表の際に、舞台からではなく客席から出入りするようになれば全員の演奏を客席で聴くことができる、というものがあつた。分科会で共有して改善したい。また2023年度に企画した「特別授業」について、他の授業に関連する予定と重なって「理由のある欠席」を認めた例があつた。どちらにも出席したい学生のためにも、日程調整を早めに行うように努めたい。

3) 今後の課題

現状ではほぼコース内の学生どうしでアンサンブルを組むことができているが、他コースの学生の協力を得たいという希望もあり、今後の課題である。また、自主的なアンサンブルとはいえ、演奏の指導体制についても分科会内で共有して、確実な学修成果の獲得につなげたい。

以上